
馬鹿と電話で

聖魔光闇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

馬鹿と電話で

【Nコード】

N9129S

【作者名】

聖魔光闇

【あらすじ】

嘘みたいな、誠の話。祖母が間違えた俺との電話攻防。オレオレ詐欺の流行っていた時代。

(前書き)

半分以上は作話。でも、こんな奴と電話したのは本当。

嘘のような誠の話。十年以上も前に身に降りかかった迷惑極まりない電話の話。その当時、僕は親元を離れ、気楽な一人暮らしをしていた。そんな折、流行っていた詐欺【オレオレ詐欺】。そんな不可解なモノに引っ掛かった親と、面倒事に巻き込まれた僕の話。

その日、僕は仕事が休みで家の中で、怠惰に溺れていた。布団の中で俯せになったまま、テレビゲームを楽しんでいた。そんな時、電話がけたたましい音をたてた。

「んだよ！ もおお！」

電話など、滅多になる事はなかったが、電話に出る事自体が面倒だった。しかし、電話は鳴り止む事なく無情に鳴り続ける。僕は仕方なく、受話器を上げた。

「あっ！ もしもし。元気だった？」

突然聞こえた男の声。しかし、僕の記憶にこの男の声は無かった。

「はあ！？ 間違い電話じゃないっスか？」

対応が面倒だった僕は、有無を言わず受話器を下ろした。その直後、再度電話がなった。

「何！？ もう、うつせえし！」

気は乗らなかったが、受話器を上げる。

「おいおい。突然切るなよ。靖志やすしだろ？ 靖志だよな。俺だよ、俺。忘れたのかよ！」

『確かに俺は靖志だけど、こいつ誰だ？ なんで僕の名前を知ってる？ そう言や、こいつ自分の事、俺としか言わねえな……』

「ああ、ゴメンゴメン。久しぶりだなあ。ところでさ、お前の名前何だったっけ？」

休日の怠惰な時間をぶち壊されたムカつきもあったが、僕の頭の

中では良い暇潰しが出来たような感覚になっていた。

「ひっでえな！ 俺の名前も忘れたのかよ！ ヒントやるから、思い出せよ！」

『ヒント貰ってもわかる訳ねえじゃねえか！ だいたい、元々知らねえヤツじゃんかよ！』

そんな事を考えて、何だかコイツと話するのが面倒になってきた。

「ヒントくれんのか？ じゃあよ、最初のヒント要求だ。この家の電話番号、親と会社しか知らない筈なんだけど、どこで知ったんだ？」

「……………」

「だんまりか？ じゃ、次のヒント要求だ。お前、俺の名前知ってたよな？ お前いつの友達だ？ その時、俺は何組だった？」

「……………」

「おいおい。黙っていたら、ヒント要求の意味ねえじゃねえか！？ 何とか言えよ！ 聞いてんのか！？」

そこまで言った途端、相手が激しく電話を切った。あまりの音に、少し耳が痛かったが、勝利に酔いしれていた。そんな時に、また電話が鳴った。

『あゝ！ しつこい！』

不機嫌になりながら受話器を上げると、

「もしもし、靖志？」

母親の心配そうな声が聞こえてきた。

「何？ 何かあった？」

声がいづもに比べて、低く聞こえた為、何かかと思った。

「靖志。変な電話かかってきてない？」

『よく知ってるな、このババア。もしかして、コイツ何か知ってるのか？』

そう考えた僕は、

「俺の知らない【俺】から、電話があったぜ」

と、素直に答えた。すると母親の口調が一変。更に低い声になっ

たと思うと、突然謝りだした。

「靖志。ごめんね。本当にごめんね。靖志」

「何があったんだよ」

「この前ね、男の子から電話があったの。初めは、おばあちゃんが電話に出ただけだけど、靖志が電話番号忘れたからって言うから、男の子に教えちゃったのよ」

「はあ？　ばあちゃん、俺と別人の声の判別出来ねえのかよ！　ってかそれ、流行りのオレオレ詐欺じゃねえの？」

「靖志！　今すぐ電話番号、変えなさい！」

暗く低い声から、だんだん血の気を浴びた声に変わったと思うと、母親は僕に命令した。

「はっ！　やだね。相手はただの根暗か暇人だ。そんな変人の為に、なんで俺が番号変えなくちゃならねえんだよ！　それにオモロイ暇潰しじゃねえか！　じゃな、あの変人の正体が知れて良かったよ。ありがとな、母さん」

そう言うのと、僕は母親の返事を待たず、受話器を置いた。

『成る程な。アイツ、本当は俺になりすますつもりだったらしいが、それも出来ず、予定変更って訳か。オモロイじゃん。遊んでやるぜ！』

母親との電話の後、そんな事を考えながらゲームをしていると、電話が鳴った。

ゆつくりと、受話器を上げると耳に当てる。相手は無言だ。暫く様子をみようと、こちらも無言攻撃にて応戦。五分程の沈黙の後、相手が敗北した。

「なんだよ！　何か話せよ！」

「やっぱりお前だったか」

「うん？　俺が誰だかわかったのか？」

「いんや。わからん。わかりたくもない」

「俺が誰だか知りたくないか？」

「いらん！　暇人の名前など聞いても仕方ない！」

「俺は暇人じゃねえよ！」

「そかそか。そりゃあ悪かった。変人だったな」

「くそお！ ナメやがって！ テメェ殺すぞ！」

「どうぞどうぞ。殺してください。じゃあ待ってるよ」

「チクシヨ！ 今、行くからな！」

オレオレ詐欺に失敗した男は、イライラした口調で電話を激しく切った。

『馬鹿だねえアイツ。感情的になったらダメでしょう。しかも、俺ん家知らねえじゃんよ！』

また、そのうち電話がかかってくるだろうと思い、またゲームを再開した。

一時間程間を置いて、案の定電話がかかってきた。

「本当はさ、俺、お前の事が好きなんだよ。わかる？ ホモなんだ」

まあ、いろいろとよく浮かぶねえ。と考えていると、

「だからさ、お前ん家教えてよ。今から行くからさ」

「はあ！？ 何を訳のわからん事を。教えるわけないでしょ！ 暇

人の変人に俺ん家を。馬っ鹿じゃねえの！ それとも、今の話が本

当で、暇人の変人の変質者かな？ うっわあ！ 気持ち悪！」

「貴様あ！ 殺す！ 絶対殺す！ 殺しに行つてやる！ だから、

どこにいる！ 教えやがれ！」

『馬鹿だねえ。コイツ。殺す！ ってわめき散らす奴に、家教える訳ねえじゃん』

「ゴメンゴメン。お前の事、勘違いしてたわ。暇人の変人の変質者じゃ無かった。馬鹿の暇人の変人の変質者のホモだった。間違えてスマン！」

「今から、行くからな！」

と言った途端、電話が切れた。僕は、次の出方を待つ事にした。

それからまた一時間後、電話が鳴った。受話器を上げると無言。

『あゝ。無言電話……』

そのまま僕も、受話器を上げたままゲームをする。しばらくして、

電話が切れた。受話器を置いて五分程経つと、また電話が鳴った。

やっぱり無言。面白くないので、からかってみる。

「なあ、無言電話はいいけどよ。お前、親元からかけてんの？ それとも一人暮らし？ どっちにしても、それ、電話代の無駄遣いだぜ。お前さあ、暇なの？ まあ俺は別にお前が破綻しようが、頭おかしくなるうが、知ったこっちゃ無いけどよ。おい！ 聞いてるか！ アホの変質者！ さっきから、無言攻撃してっけど、逆探知されてんぞ。あゝあ、俺、知くらねっ！」

逆探知と聞いて、馬鹿は焦ったらしい。

「ば、馬鹿！ 冗談だろ！ 冗談！ マジで逆探知してんのか！？」

『アハハ。オモロイねえ、馬鹿は』

「嘘言っでどうするよ。お前が初めにかけた俺の実家、親父がよ、警察なんだわ。じゃあな。オモロかったぜ！」

そう言っで、僕は受話器を置いた。そしてそのまま、電話会社へと向かった。暇潰しの終了の為に。

『馬鹿の相手もたまには、オモロイねえ』

電話会社への道中、自然と笑みがこぼれていた。

(後書き)

オレオレ詐欺。携帯が流通して、ナンバーディスプレイになったら、通用しないわな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9129s/>

馬鹿と電話で

2011年5月1日23時55分発行